

# カツオ 東部太平洋

Skipjack, *Katsuwonus pelamis*



## 管理・関係機関

全米熱帯まぐろ類委員会 (IATTC)

## 最近の動き

最近の資源評価は IATTC 事務局により 2012 年に行われた。2015 年には、前年までの各種の漁業・生物学的指標値が更新された。

## 生物学的特性

- 体長・体重：尾叉長 100 cm・30 kg
- 寿命：6 歳以上
- 成熟開始年齢：1 歳
- 産卵期・産卵場：周年・表面水温 24℃以上の海域
- 索餌場：熱帯・温帯域
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海鳥類など

## 利用・用途

缶詰原料

## 漁業の特徴

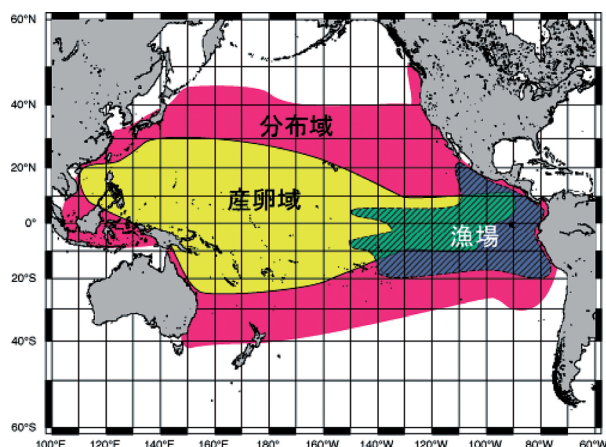
現在の漁獲はほとんどがまき網による。まき網では、集魚装置 (FAD) を用いる操業と素群れを対象とする操業があり、漁場はカリフォルニア沖から北部南米沖である。国別ではエクアドルが約半分を占め、次いでパナマ、ベネズエラ、コロンビア等が主要な漁獲国となっている。日本は本海域でカツオを主対象とした漁業を行っておらず、漁獲量ははえ縄による僅かな量のみである。

## 漁獲の動向

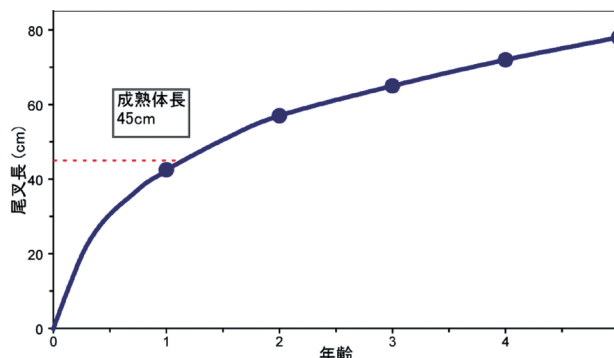
1950 年代までは竿釣りを主として約 5 万トンの漁獲であったが、1960 年代から竿釣りは急速に減少し、代わってまき網による漁獲が主となった。1990 年代から漁獲量は増加傾向にある。近年の総漁獲量は 20 万～30 万トンを維持している。2014 年は 26.3 万トンであった。

## 資源状態

最近の資源評価は IATTC 事務局により 2012 年に 4 つの指標値 (a. 漁業・生物学的指標値; b. 標識データ解析; c. サイズ組成資源評価モデル; d. 空間資源動態モデル) の解析により行われた。相対資源量は 2000 年以降増加に転じ現在まで横ばいで推移している。相対加入量も同様の傾向を示し、2000 年以降横ばいで推移している。資源状態は不確実であるが、資源が悪化する明確な証拠は無いとされ、資源は高位、横ばいと判断された。2015 年には、前年までの各種の漁業・生物学的指標値 (まき網による漁獲量、FAD 操業 CPUE、素群れ操業 CPUE、標準化努力量、平均 (漁獲個体) 重量、相対資源量、相対加入量、相対資源利用率の 8 つ) が更新された。漁業・生物学的指標値からは資源状態を判断することは難しいが、2015 年に更新された FAD 操業 CPUE、素群れ操業 CPUE においては共に低下傾向が認められなかった。



太平洋におけるカツオの分布と漁場  
(Matsumoto et al. 1984, Schaefer 2001)



東部太平洋におけるカツオの成長 (Matsumoto et al. 1984)

## 管理方策

資源状態は高位、横ばいであり、本種を対象とする保存管理措置は IATTC において導入されておらず、メバチ・キハダの保存管理措置として、まき網漁業に対し 62 日間の全面禁漁及び沖合特定区での 1 か月間の禁漁が導入されており、結果的に本種に対する漁獲努力量は制限されている。

## 資源評価のまとめ

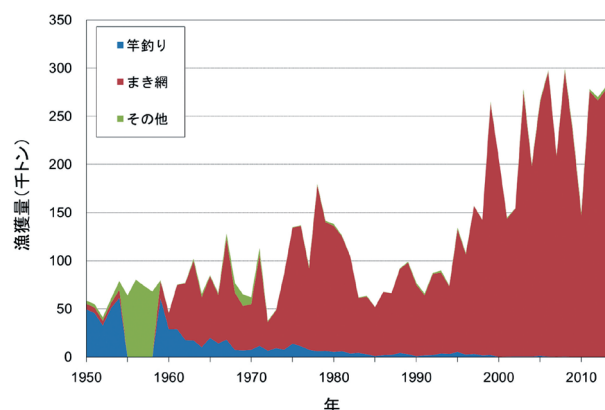
- 2012 年に IATTC 事務局により 4 つの指標値の解析により評価。
- 資源状況は不確実であるが、資源が悪化する明確な証拠は無い。

## 管理方策のまとめ

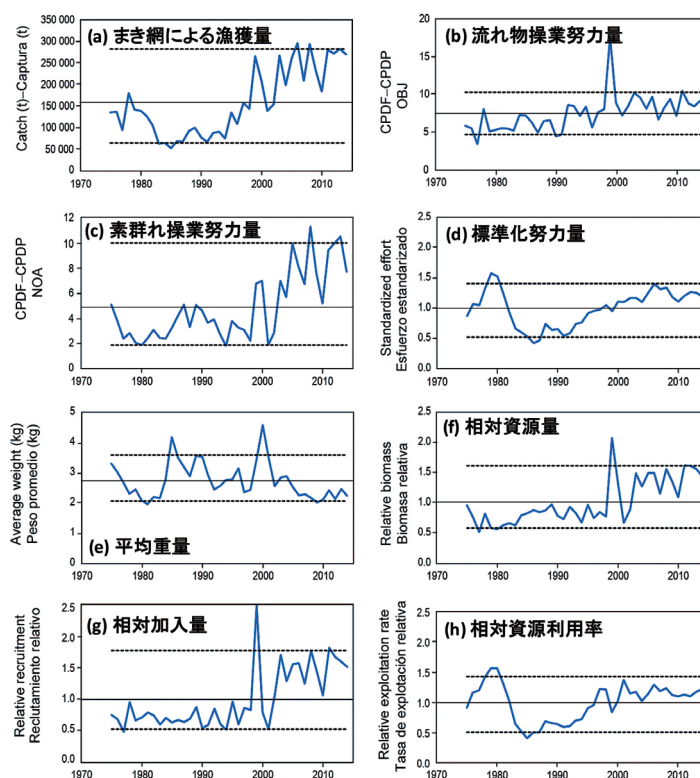
まき網漁業に対し 62 日間の全面禁漁及び沖合特定区での 1 か月間の禁漁(メバチ・キハダの保存管理措置だが、結果的に本種に対する漁獲努力量が制限)。

## カツオ（東部太平洋）の資源の現況（要約表）

資源水準	高 位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	15.0 万～28.0 万トン 平均:24.8 万トン(2010～2014 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	58～74 トン 平均:65.2 トン(2010～2014 年)
最新の資源評価年	2012 年(2015 年に指標値のみ更新)
次回の資源評価年	未 定



東部太平洋におけるカツオの漁法別漁獲量（データ：IATTC 2015）



東部太平洋におけるカツオ資源指数（IATTC 2015 を改変）

(a) まき網による漁獲量、(b) FAD 操業努力量（CPUE）、(c) 素群れ操業努力量（CPUE）、(d) 標準化努力量、(e) 平均（漁獲個体）重量（kg）、(f) 相対資源量、(g) 相対加入量、(h) 相対資源利用率（CPDF：Catch per days fished）